令和６年度　経営協議会学外委員等からの意見、指摘等に対する取組状況

令和７年１０月現在

	意見交換テーマ、意見・指摘等の内容	主な取組状況・今後の取組予定等
第2回 (R6.6.17)	○報告事項 佐賀大学の教育組織改革（共同教育課程・学部等連係課程）について	
06-2-1	コスメティックサイエンス学環は、佐賀らしく、佐賀県もコスメティック構想を行っているため、連携しやすい。出口をしっかりと持ち、県内で輝いてもらえるように頑張ってもらいたい。	コスメティックサイエンス学環は、令和7年8月4日付で大学設置・学校法人審議会から設置認可の通知があり、現在、カリキュラム編成、新規の教員公募、施設整備など学生受入れの準備を進めています。また、学問領域としての新規性などから社会から大きな注目を集め、多数のメディアからの取材があり（9/16現在14社）、広報活動に努めるとともに募集定員の30名に対し、より多くの志願者を集めるため、オープンキャンパスや出前授業に参加しています。 地域と共に歩む大学として、佐賀県の産業構造や若者の定着促進に貢献する人材を輩出し、佐賀県内で輝ける未来を創るため、学環の教育・研究体制を一層充実させていくために、令和7年5月20日付で佐賀県と、令和7年3月31日付で唐津市との間で化粧品科学における連携協定を締結し、具体的な事業について両自治体と協議を行っています。 コスメティックサイエンス学環で横断的かつ化粧品科学に特化した教育プログラムを修得した学生や卒業生が県内コスメ産業に積極的に携わることができるよう、県内企業とのインターンシップや共同研究の場を拡充していく予定です。
第4回 (R6.11.25)	○意見交換テーマ 佐賀大学が向かうべき将来構想の議論	
06-4-1	裕福で優秀な外国の人達が日本に入ってきて、小学校から日本の教育を受けた人材が活躍する時代が来ると予想される。その人たちと競争していくためには、全国、もしくは世界から優秀な学生を集める必要がある。 また、教員もダイヤモンド半導体などの秀でた研究を継続し、大学はそれを伸ばしていく必要がある。	全国から優秀な学生を集めるためには、先鋭的な教育プログラムを設置することが必要です。今回設置した「コスメティックサイエンス学環」は国公立大学としては日本初の取組であり、全国的にも注目されています。こうしたトピックをうまく活用し、全国に向けた広報活動を展開します。一方、世界からの学生受け入れについては、特に東南アジア地域を対象に、理工学研究科において優秀な留学生を優先的に配置するEPATやIEPAD等の教育プログラムを通して優秀な学生を獲得しています。今後、博士等の高度人材育成が求められるなかで、より魅力のある教育プログラムの構築や受入体制を整備し、優秀な学生の確保を図っていきます。また、優秀な学生を集めるだけでなく、地域の学び手が優秀な外国籍の方々と競争できるような力を育成することも大切であるため、この両輪をまわすことのできる仕組みの構築を目指したいと考えます。 佐賀大学は、地域課題に根ざした教育・研究を強みとしています。これは地方大学として非常に重要な役割であると考えますが、今後はさらに「地域に根ざしながら世界とつながる」という視点をもって、地域資源を活かした研究を、国際共同研究や海外展開につなげ、世界的価値を創出していきます。 例えば、海洋温度差発電では、久米島の地域資源である「海洋深層水」を利用して、エネルギーと水を再生可能エネルギーにより自給しながら産業振興と雇用の創出を図るといった「久米島モデル」が海外の島嶼国からも大変注目を集めています。また、令和７年３月には、産学交流プラザ内に「国際展示ルーム」を開設し、佐賀大学の魅力を広く伝え、地域社会や国際社会との連携をさらに深めていきます。 佐賀大学のような地方国立大学が先端分野で世界と戦うには、限られた資源をどこに集中するかが重要であると考えます。特色ある研究分野に絞って投資し、そこに国内外の優秀な研究者を集めるといった戦略が有効であり、令和５年度から、学外有識者を交えた研究戦略マネジメント室において全学的マネジメントを実施し、重点研究への資源分配（投資）及び研究の進捗確認を行っております。 また、長期的な研究力の底上げのため、優秀な若手研究者の確保・育成と定着支援（研究環境・キャリアパスの整備など）にも取り組んでいます。
06-4-2	近年の文科省の政策方針は、国際的にもとがった大学を作る方向に注力しているが、そこに多くの予算を投じるのではなく、地方大学の優秀な教員が、完全な平等とはいかなくとも、適切に研究できるだけの環境を維持することにもっと力入れるべきではないか。 財源については、国庫のみへの依存しないという観点からは、欧米の大学に比べると日本は弱いため、個人や企業からの寄附にもっと力を入れる、病院だけでなく、他のビジネスをやる等、大学もお金を獲得する努力を強めるということは必要ではないかと思う。	国立大学では、運営費交付金の削減に加え人事院勧告の大幅な増額改定、物価高騰といった厳しい状況が続いており、今回ご意見としていただきましたように、教育研究環境を適切な規模で維持していくためにも、運営費交付金のみに依存しない安定的な財務基盤の確立が喫緊の課題と考えております。 運営費交付金以外の外部資金の獲得については、過去の経営協議会（令和3年11月8日）においても議論がありましたが、国立大学では実施できる範囲が限られております。これまでのところ、科研費などの外部資金獲得増へ向けた取組に加え、個人や企業など社会からの支援強化につながるものとして、クラウドファンディングやネーミングライツ制度の実施などにも取り組んでおりますが、自治体との連携においては、近年、佐賀県との「TSUNAGIプロジェクト」でも受入額が年々拡大するといった好循環も生まれて来ております。 また、他機関とのコピー用紙等の共同調達に加え、西九州大学との資金の共同運用についても実現することができており、これからも学内の多様な研究資源や保有施設・設備の更なる活用、他の教育機関等との連携・協働を通じた多様な財源の獲得に向け引き続き取り組んでまいります。

令和５年度　経営協議会学外委員等からの意見、指摘等に対する取組状況（検証）　　令和７年１０月現在

	意見交換テーマ、意見・指摘等の内容	主な取組状況・今後の取組予定等	検証状況
第2回 (R5.6.26)	○審議事項 令和６年度概算要求事項について		
05-2-1	地域創生ウェルビーイングセンターについて、佐賀大学方式モデルを作るとのことだが、佐賀大学で受け入れている障がいのある学生に対して、成績の客観的評価、社会的適合のためのフォローを含めて行う必要があるのではないか。	ウェルビーイング創造センターの学修支援部門とキャリア支援部門が連携し、障がいのある学生に対して、以下の取組を実施（予定を含む。）しています。 ・個別の面談及びインターンシップ最中のジョブトレーニング ・外部機関と連携した発達障がい特性のある学生向けの研修等 ・今後、障がいのある学生を対象にキャリア教育としてインターンシップ等を含めた伴走型の就職支援プログラムを開発し、卒業後の円滑な社会生活への接続を支援	障害のある学生に対してのフォローとして次の２つの支援と併せて、【佐賀大学方式モデルプログラム】としての下記取組を始めています。 （１）成績の客観的評価による支援 現状では、同じ科目で複数回単位を取れていない学生に対して合理的配慮として、個別に学習面をサポートする学習サポーターによる支援を行っています。今後は、学習支援部門教員がR7.10月以降採用されるのに併せ、学修に課題を抱える学生のうち、成績不審者のスクリーニング学習を実施することとしています。 （２）社会的適合の支援 2015年から月例会として、社会人生活に必要な①地域生活スキル、②ソーシャルスキル、③適応行動スキル、④社交スキルなどのスキルを身に着けさせる支援を行っています。 【佐賀大学方式モデルプログラム】 （１）障がいのある学生を対象とした伴走型就職支援プログラムとして、企業のインターンシップとその最中のジョブトレーニングおよび外部機関と連携した研修を組み合わせたプログラムの開発に取り組んでいます。 インターンシップ最中のジョブトレーニングおよび個別の面談 障害学生を対象としたインターンシップ等（令和６年度実績） 企業名　内容　参加者数 TOTO　インターンシップ　2名 オプティム　キャリアプログラム　2名 木村情報技術　キャリアプログラム　2名 ﾘｸﾙｰﾄｽﾀｯﾌｨﾝｸﾞ　体験プログラム　1名 ｸﾗﾌﾂ ソフトバンク　会社説明会・面接　1名 九州大学学務部 キャリア支援課　会社説明会　1名 （6社）　合計　9名 個別の面談：利用学生数　31名（130回）（令和６年度実績） 【内訳】芸術地域デザイン学部：4名（15回）、経済学部：3名（20回）、 理工学部：20名（85回）、農学部：3名（9回）、医学部：1名（1回） （２）外部機関と連携した発達障がい特性のある学生向けの研修等 パーソルダイバース株式会社との連携による、就職準備ガイダンス 【障害や疾病などにより働くことに不安のある学生のための就職セミナー】 令和6年12月25日及び令和7年2月13日：4名 【コミュニケーションサポートプログラム】 令和7年2月14日：3名 以上のことより、「学生が卒業後、円滑な社会生活を実現する」ための支援プログラムを構築することができたと考えています。
第5回 (R5.11.20)	○意見交換テーマ 佐賀大学が向かうべき将来構想の議論		
05-5-1	佐賀大学の志願倍率が高い傾向にあることについて、偏差値や通学のしやすさなどが議論になりがちだが、志望者が多いという根底には大学が良い教育をしているということである。数字で表しにくいが、佐賀大学の卒業生たちにこの大学は良い大学であり、良い勉強ができたと思われる教育を続けることが大事ではないか。	現在、佐賀大学では教育力の「見える化」を進めており、2023年6月に公開された「そのサガ見える」ウェブサイトを通じて、教学IRデータを活用し、教育成果をわかりやすく伝えています（https://www.oge.saga-u.ac.jp/mieru/）。このサイトでは、学生の成長実感や学修成果をデータで示し、佐賀大学の教育の強みをアピールしています。また、ラーニングポートフォリオの導入により、学生が自分の学びを振り返り、成長の過程を確認できるシステムを提供し、学生の学びをサポートしています。 今後も、教育成果をさらにわかりやすく伝えるために「そのサガ見える」ウェブサイトの内容を充実させる予定です。具体的には、佐賀大学が育成したい能力に対応する科目や学びの特色を紹介するページを追加し、閲覧者がより深く理解できるようにします。また、ステークホルダーからのフィードバックを受け付ける仕組みを拡充し、高校生や企業からの質問や提案に対応することで、教育改善に役立てます。 これらの取組を通じて、佐賀大学は引き続き高い教育水準を維持し、佐賀大学を取り巻く皆様に「良い教育を提供している大学である」と感じていただけるよう努めてまいります。	佐賀大学では、教学IRデータを核とした学修成果の可視化を目的に、「そのサガ見える」ウェブサイト（https://www.oge.saga-u.ac.jp/mieru/）を通じて、学士力の伸長、アセスメント（TOEIC／PROG）、授業満足度、到達目標達成度などを一体的に公開しています。これにより、卒業生・在学生・受験生・企業・地域など多様なステークホルダーが“良い教育”を実感できる情報環境を提供しています。特に、各教員による授業改善の成果もあり、卒業生による佐賀大学の教育全般に対する満足度は年々上昇し、現在では90％を超えています。 令和7年3月に上記ウェブサイトに「みんなで創る教育改善」ページ（https://www.oge.saga-u.ac.jp/mieru/kaizen/）を追加し、保護者・企業・卒業生からの意見を公開しました。また意見を反映する仕組と特色ある学びを提示しました。例えば、芸術地域デザイン学部では、地域や企業との協定を通じて「実践力」「課題解決力」「主体性」などの育成を強化しています。 さらに、アンケート結果やコメントからは、本学の教育に対して「良い学びができている」という実感や肯定的な評価が確認でき実際の信頼と共感を得ていることがうかがえます。こうした情報公開は、九州各地で実施している高校教員向け説明会でも周知しています。 今後は、指標の年次更新に加え、伸ばす能力と科目・取組の関係を明示する工夫や、ステークホルダーごとの意見収集の仕組みを充実させることで、「佐賀大学は良い教育を提供している」という実感をさらに高めていきます。

05-5-2	リージョナル・イノベーションセンターでは、研究成果をまとめて紹介しているが、佐賀大学には世界に誇れるものが多数あるため、特に高校生にもわかりやすく伝えて、意欲のある学生に来てもらえるようにしてほしい。	令和5年度末に実施した佐賀県との連携プロジェクトであるTSUNAGIプロジェクトにおいて、高校生向けに研究成果の報告の場を設けました。参加者からは、「自分の将来に向けて、高い志をもってチャレンジしていきたいという思いを持つことができた」、「これまで以上に佐賀についての理解が深まった」といった反応が寄せられました。 また、産学交流プラザでは、研究成果を展示するインフォメーションコーナーを設置しており、国際展示室の設置も予定しているため高校生を含め多くの方にお越しいただければ幸いです。 なお、本学のホームページやオープンキャンパスに参加された起業に興味のある高校から連絡があり、大学発ベンチャーの学生との意見交換会の場を設け、本学に起業している学生が多くいること、コワーキングスペースの設置など起業支援していること等を伝えました。 今後、高校生向けにもわかりやすく伝わるよう研究成果公開を行い、引き続き高校との接点を増やすため、本学入試課および佐賀県担当課との連携を強化してまいります。	令和7年度において佐賀大学の各キャンパスをはじめ佐賀県内の施設をPRするイベント（SAGAたてもの結び）を開催し、参加施設である美術館では、高校生向けに各学部のポスター展示を行い500名（9月末時点予定含む。）を超える高校生にお越しいただきました。また、産学交流プラザのインフォメーションコーナーでは、農学部生物資源教育研究センターの紹介動画を放映し、多くの方に御覧いただいております。 また、高校との接点を増やす取組として、入試課が発行する大学案内に起業支援に関することや学内に入居している企業に関すること等情報提供を行い、佐賀県担当課とはTSUNAGIプロジェクトの成果報告会の場を活用してPRを進めております。
第7回 (R6.3.25)	○意見交換テーマ 組織改革について		
05-7-1	大学が特定の研究領域の支援及び融合をはかることは組織を作る上で良いことである。研究マネジメント室は教員の多岐に渡る研究を管理する組織とのことだが、教員に研究支援の依頼をする際に企業側が教員の研究範囲に合わせて持っていかなければならず、企業側としては苦労している。企業の考えに合うような研究者を大学で探すことができれば共同研究が進みやすくなるのではないか。	企業からの一般的な研究支援の相談については、これまでリージョナル・イノベーションセンターに技術相談窓口を設置して組織的に対応してきたところではありますが、その周知方法等に第三者に伝わりにくい部分があったかと存じますので、改善を図りたいと思います。 研究戦略マネジメント室の設置を契機として、研究戦略マネジメント室がマネジメントするＦＲ推進プラットフォーム、新素材プラットフォームといった研究を推進する組織に専任のＵＲＡを配置し、研究相談体制を強化いたしました。 今後も継続して周知方法等の見直しを図り、共同研究推進に取り組んでまいります。	既設置の技術相談窓口に加え、本学のシーズと企業等のニーズのマッチングを推進するため、企業等が本学教員のシーズについて検索しやすくなるように、領域ごとに研究者を検索できる研究者一覧（産学連携編）を作成しました。本学ホームページの教員活動データベースのページにリンクを掲載するとともに、ＱＲコード付きの名刺サイズのカードを作成し、配布できるようにしました。 また、研究戦略マネジメント室の伴走支援のもとＦＲ、新素材プラットフォームに加えて、令和７年度より地域課題に対応し、共同研究等で課題解決を図る農水産業振興研究プラットフォームを新規設置したところです。 全てのプラットフォームにＵＲＡが参画しており、企業と大学の橋渡しを担っています。 このような状況から、従前と比較し体制整備が進んでいます。